

# 英語の授業における ICT 活用例： 「英語ライティング」 の場合 The Utilization of ICT in English Classes: The Case of English Writing

林 弘美

Hiromi Hayashi

英語・英語学研究室

hhayashi@my-pharm.ac.jp

## 1. 英語における ICT の活用 <sup>1)</sup>

ICT (Information and Communication Technology) は、Communication という単語を含んでいることから大学での授業の中で外国語学習において活用しやすいものと考えられる。明治薬科大学では、英語の四技能(リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング)に特化した授業をそれぞれ選択科目として開講しているが、中でもリスニング演習を中心とする「CALL 英語」では、学内 LAN の VOD(Video on Demand)システムをはじめとする動画ファイル・音声ファイルやインターネット上の素材、CD-ROM の利用などの点で ICT を最大限に活用した授業となっている。

本稿では、「英語ライティング」の授業において ICT を活用することにより効率化できるところときめ細かい指導の必要などところを見極め、授業の活性化・指導の向上を模索している現状を報告する。

## 2. 英語ライティングの場合

筆者が担当する「英語ライティング」という科目では、テキストによる演習以外の課題として每学期英

文エッセイの作成を指導している。英文エッセイの作成にあたっては、内容面に関わる指導が必要であることに加え、その前段階として形式面の指導も欠かせない。形式面としては、文法等の面で適切な表現手段を用いるといったこと(便宜的に“形式面 A”とする)と、より具体的に英文を書く上で守るべき書式(便宜的に“形式面 B”とする)を説明している。つまり、英文エッセイの作成を次のような部分からなるものと考え、それぞれについて指導している。

### (1) 英文エッセイの作成

- ① 英文エッセイの内容を考える＝内容面
- ② 適切な表現手段を用いる(文法等)  
＝形式面 A
- ③ 英文書式に慣れる＝形式面 B

## 2.1 形式面 B に関すること

上述の形式面 B について、より具体的に述べてみることにする。典型的な英文エッセイの段落構成としては、(2)のような例を挙げている。

- (2) 第1段落: Introduction
- 第2段落: Discussion 1
- 第3段落: Discussion 2
- 第4段落: Conclusion

第1段落において、エッセイ全体で主張したいことを導入し、続く第2、3段落でそれを支える論拠を展開し、最後の段落で結論を書く、というパターンである。(2)では、計4段落の場合を示したが、論拠が3つ以上ある場合にはそれぞれに1段落を当てることにな

---

<sup>1)</sup> 本稿は、2010年2月17日に明治薬科大学で行なわれた“第12回マルチメディアを利用した教育研究発表会(MBI発表会)”における口頭発表に加筆したものである。発表に際しコメントを下さった皆様に感謝を申し上げる。なお、“ITコンソーシアム2009”におけるポスター発表(林(2009)参照)およびその報告書の内容と一部重複する部分がある。

り、計5段落以上となる。さらに細かい点として、各段落のはじめの数文字分は空ける(インデントをつける)こととし、ピリオド、コンマ、引用符等の使い方も授業で説明している。

## 2.2 段階的な指導

実際の授業においては、2つの意味で段階的な指導を行っている。まず、(3)a→b→cのように課題の面で易しいものから難しいものとなるように考えている。

- (3) a. テキストによる基本事項の確認
- b. 毎回の課題(ショートエッセイ)
- c. 英文エッセイ
  - ① 準備段階
  - ② 英文エッセイの提出
  - ③ 試験

(3a)のテキスト関係の課題や(3b)のショートエッセイでは、手書きによる英文を紙に書いて提出する方式をとり、(3c)の英文エッセイではPCを使用して英文を作成し提出することとしている。さらに、2009年度後期においては、(3c)の英文エッセイ作成でも段階的な指導として①→②→③の手順を踏んだ。その際、①と②の段階でサイバーキャンパスのレポート機能を利用した。サイバーキャンパスとは、植沢他(2008)が報告しているように明治薬科大学におけるe-Learningシステムのひとつである。林(2009)ではこのサイバーキャンパスのレポート機能を利用した英文エッセイ作成指導の準備段階について報告した。

次節では、この①と②(=(3c①)と(3c②))の段階でサイバーキャンパスを利用した結果について述べる。

## 3. 実践例

### 3.1 準備段階(3c①)

英文エッセイ作成の準備として、まず、テキストに与えられた英文を指定された形式に従ってPCで作成した文書を提出するという課題を出した。2009年度前期の場合は、各自プリントアウトしたものを提出させたが、2009年度後期はサイバーキャンパスのレ

ポート機能を用いて提出させることとした。

具体的には、英文作成上の共通事項(ピリオド、コンマ、引用符の使い方)やスタイルシートのもの(体裁を整えるためのもの;タイトルの文字を大きく、氏名は右寄せ、行間を調整し見やすくする、インデントをつける、等)について、サイバーキャンパスのレポート機能を用いて評価を行った。学生には、事前にメールで連絡し、そのメール内のリンクによりサイバーキャンパスにアクセスしやすくするよう工夫した。

このような課題への取り組みはこれまでも行ってきたが、指定通りにならないことが多かった。今回、サイバーキャンパスのレポート機能を利用することにより、指定された事項が明示化されたため、比較的指定通りに英文を作成できた学生が多かったと感じた。

課題提出後、学生に対してアンケートを行ったところ、課題の提出方法がわかりにくいということもなく、また、評価をサイバーキャンパス上で自分で確認できるのが良い、という感想があった。

### 3.2 学生自身が作成した英文エッセイの提出(3c②)

#### 3.2.1 課題

3.1で紹介した準備段階の後、各自が自由に決めたテーマで4段落以上の英文エッセイを作成し、サイバーキャンパスのレポート機能により提出するという課題を出した。実際に英文を書き始める前に、アウトラインとして各段落で述べたいことの要点をメモ書きにしたものを提出させ、段落構成が適切なものになっているかを確認した。

#### 3.2.2 結果(感想)

結果は次の通りである。

##### 3.2.2.1 教員側

段落構成と英文書式の両面において、従来よりも形式の整った英文エッセイが多いという印象を持った。

### 3. 2. 2. 2 学生側

学生に対しては、最終授業時に(4)のような項目の自由記述による無記名アンケートを行った。

- (4) a. この授業の良かったところ
- b. この授業の悪かったところ
- c. テキストについて
- d. 英文エッセイについて
- e. サイバーキャンパスを利用した提出方法について
- f. その他

ここでは、(4d)と(4e)の結果について報告する。

#### 3. 2. 2. 2. 1 英文エッセイについて

英文エッセイ作成に対する学生の回答は(5)のようなものであった。

- (5) a. テーマを決めるのが大変でした。しかし、授業で注意点やメモの仕方を教えて下さったので、書き始めたら、それほど苦労しませんでした。
- b. テーマが自由なこともあって、自分の書きたいことを書いて楽しかった。
- c. 何度か書くのでネタがなくなる。
- d. パソコンでの英文入力のルールを学べて、良い経験になりました。
- e. 意外と自分が勘違いしているところなど、添削してもらわないと気づかないことなど多く、よかったです。
- f. 初めて書くエッセイだったのであたふたしました。
- g. 大変だったがそれなりに達成感があったのでやって良かった。
- h. 初めての内容なので新鮮で良かったと思います。しかも意外と難しかったです。
- i. 内容が自由だったのでテーマ探しに時間をついやしてしまった。
- j. いろいろなことを考える良い機会になった。

内容面の検討に時間がかかったことが伺われるが、それを表現する上で必要となる形式面を確認できたことに対する肯定的な評価が見られる((5a)、(5e)な

ど)。

#### 3. 2. 2. 2. 2 サイバーキャンパスについて

サイバーキャンパスを利用した提出方法については、(6)のような回答であった。

- (6) a. 家で提出できて、評価を確認できたので良かった。
- b. 採点を待つのが楽しみだった！
- c. 使うのは簡単なので大丈夫だった。
- d. 便利
- e. 自分のペースで課題を出来るので便利
- f. 使いやすかったと思います。
- g. 普段パソコンを使わないのでやっておいてよかった。
- h. ちゃんと届いたか心配だった。
- i. 久々に使ったので難しかったです。
- j. 提出を忘れる可能性があるかも。。。。
- k. あまり使ったり見ることはないのであまりよくない。
- l. 提出しやすかった。
- m. 提出が簡単で良かったです。

学生にとっては、使用法が簡単で利便性が高いことがわかった。ただし、数名((6h)、(6i)、(6k)など)は不安を感じたようであるので、今後ともより丁寧な説明・指導をすることを心がけたい。

### 3. 3 試験

授業で学んだことを確認する期末試験は、(7)のような内容と配点にした。

- (7) a. テキスト関係 (65 点分): 文法事項等
- b. 英文エッセイ (35 点分)
  - b-1. 表現面 (=形式面A) (25 点)
  - b-2. 形式面B (10 点)

テキストで学んだことや英文エッセイの添削を通じて説明した、学生に多く見られる間違い等の文法事項に関わる問題を筆記試験として課し、同時に予め仕上げた英文エッセイを提出させる、という試験である。文法事項等の筆記試験と英文エッセイの点数には大まかには相関関係が見られた。しかし、筆記試験

ではあまり点数が取れない学生でも、英文エッセイの形式面に関わる部分は事前に授業内で確認しているため、自信を持って取り組めたはずである。この点で、英文エッセイの形式面を授業で確実に指導することは、英語の苦手な学生にとってはその部分は取り組みやすいものとなり、また、英語の得意な学生にとっては内容面の方により時間をかける余裕が生まれることになる。結果として、多くの学生にとって有意義な面があると思われる。

#### 4. まとめ

英語の発信能力に関わる「英語ライティング」の授業では、学生自身の意見・考えを表現することがまず大切である。しかし、その意見・考えを伝える手段である表現形式を適切に用いることもまた求められる。特に、英語によるエッセイ作成という個々の学生自身の考えと英語力が反映される課題においては、一律に守るべき形式面をICTの活用により効率化することで、残りの時間・労力を内容面に注ぐことが可能になるとと思われる。

今回は、サイバーキャンパスのレポート機能の利用により、事前に課題とその評価を明示することができ、学生にとって取り組みやすいようになった面があると感じられた。サイバーキャンパスに限らず、他の手段のICTの活用でも同様のこと、あるいは、より効果の高いことができるかもしれない。少なくとも、今回の事例は、英文エッセイのように一見個別対応が基本であると思われる課題においても、部分的にはICTを活用することで、学生・教師の両者にとって利便性を高められる可能性があることを示していると考える。

#### <引用文献>

- 1) 植沢芳広他 (2008) 「サイバーキャンパスコミュニケーション機能」 私立大学情報教育協会平成20年度教育改革IT戦略大会における口頭発表. 2008年9月3日.
- 2) 林 弘美 (2009) 「サイバーキャンパスのレポート機能について: 英文エッセイ作成準備段階での利用」 IT コンソーシアム2009(於: 明治薬科大